

現時における大聖人

山口 範道

時とは過去・現在・未来の称であり、無始無終に亘るわた長さである。現時・過時・未来時は現在・過去・未来のことであり、これは仏法で説く三世である。

大聖人は此の三世に常住遊ばされて衆生に大慈悲を垂れ給ふのである。末法の衆生は三世において戒壇の大御本尊を即大聖人と信仰し奉って、そのところにおいて功德善根を積むことが唯一の正信正行である。

ところが、その世世時代時代において御登座なされる法主上人を、現時における大聖人であるという人が居る、大聖人は即久遠の御本仏であらせられるから、若しそうであれば世世の御主上人は久遠の御本仏であるということになる。そうすると滅後六十余人もの大聖人即御本仏が御出現されたことになる。

その時代の御主上人が現時（現在世）における大聖人であれば、我々衆生は末法万年の間の現時において拝し奉らなければならぬ日蓮大聖人即ち貞応元年に御出現遊ばされ、弘安五年に滅不滅を現ぜられた三世常住の久遠の御本仏大聖人は何処にいらっしゃるのであるうか。

当宗の三宝（仏法僧）の立て方は日寛上人が明示されている通り、仏宝は日蓮大聖人であり、法宝は戒壇の大御本尊であり、僧宝は日興上人己下御歴代法主上人である。この三宝は末法万年に亘って崩れ改変されるものではないのである。

故に、現時においても、過去時においても、未来時においても、仏宝は大聖人であり、法宝は戒壇大本尊であり、僧宝は日興上人己下御歴代の法主上人であることに変わりはないのである。

もし、現時（現在世）における法主上人（僧宝）が日蓮大聖人であるということになれば、当宗の三宝は、僧宝が仏宝になり、末法の三法の立て方に大きな誤りが生じることになるのである。

古来当宗の信者が、僧宝の日興上人が大聖人であるとか、又日有上人、日寛上人を大聖人であると言ったことは聞かないのである。このことは六百有余年間、大石寺は仏法僧の三宝を混乱することなく正しく立てて、血脈の正統を守って来た証拠である。

御本尊七箇之相承の中に「代々の聖人悉く日蓮なりと申す意なり」（聖三七九）と申されているのを引用して、歴代の法主上人は現時における大聖人であると言う人があるが、この御文では「代々の上人は日蓮なり」と申さ

れているのではなくて「代々の上人は日蓮であるという意なり」と申されているのである。この「意」の語を深採すべきである。

意という語は「意義、意味、おもひ、かんがへる」という意味をもっているのである。

信心修行する上に於て、その時代の法主上人に対し奉りて、大聖人の信者は、そういう意義とおもひを抱き持たなかったならば、広布という目的達成に異体同心して精進することも出来ないし、又教団の団結も、個人の成仏も出来得ないのである。

尚又、左京日教の六人立義破立抄私記に「代々の上人は日蓮聖人の如き御本尊也」という文あるを引用して、代々の法主上人が御本尊であるという人があるが、日教が大聖人の法門に精通して全く誤りなしと丸呑みにするのは早計である。日教のこの解釈は正しいとは思えないのである。日教の考えがもしそうであっても、これは考えすぎであり、本文の意味をよく読み取る必要があるのである。「日蓮聖人の如き」の「如」という語は「似ている、ごとくにす、同じようである」という意味である。故に、日教は「代々の上人は日蓮聖人であり御本尊である」と断定していないのであって、大聖人御在世當時の弟子檀那は御本仏大聖人を中心に信心修行に励み得道

をしたように、滅後の衆生も、戒壇の大御本尊即大聖人と仰いで受持信行し奉って、その時代時代の正統血脈にあらせられる法主上人を中心に信心の血脈を乱さないように信を決定し精進しなければならぬという重要な意義を述べようとしているのであると会通すべきである。

御信徒に対し当宗の三宝を明示しておき乍ら、若し僧分において、現時においては僧宝が仏宝であるとか、又久遠の本仏本尊であるというような考えを立て、末法の三宝を改変し乱すような言を用いる者があれば、それは厳に慎しまなければならぬことであると思うのである。その時代、世々においての法主上人は、信心修行の上において大聖人と同じように拝しても、大聖人であると拝しては当宗の三宝の立て方に大誤謬を生じさせるのである。

僧宝の日興上人に対して、大聖人は本門弘通の大導師なりと明確に仰せられているのであって、この本門三大秘法弘通の大導師が僧宝であるというところを心して拝すべきではなからうかと思考するのであるが……。